
暗殺者

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者

【Nコード】

N3690D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

次々と国家の中枢を担う要人達が殺されていく国があった。事件の解決に名乗り出た王子はその事件を解決できるのか。そして暗殺の武器は何なのか。中世のイングランドをイメージして書きました。

第一章

暗殺者

近頃この国では暗殺が頻発していた。犠牲者はいずれも国の中枢を担う優れた者達ばかりである。

「今度はローズ卿がか」

「はい」

国王であるバッキンガム王にまたしても悲報が届けられる。彼は王の間においてそれを聞いて思わず顔を顰めさせた。そのうえで言葉を発するのであった。

「また同じなのだな」

「同じです」

報告に來た首相のコノート公爵が述べる。実は彼の前任者もまた暗殺されているのだ。

「顔が真っ黒になって事切れておりました」

「苦悶の顔を浮かべてだな」

「その通りでございます」

公爵はそう王に告げる。そこまで聞いた王の顔がまた険しくなったのであった。

「これで何人目か」

「十人目かと」

公爵はまた答える。

「今月に入って」

「先月では七人だったな」

「そうです」

思えばかなりの数である。しかもその全てが同じ死に方である。これで何も無いと思う程王も公爵も愚かではなかった。

「全て。怪死か」

「記録では流行り病にしておりますが」

「記録は記録だ」

王は言い捨てた。実際のところ記録は記録であり真実ではないのだ。公では病死になっただけでも実際は違うということなど歴史においてにはざらである。今もまさにそれであった。

「あくまで記録でしかない」

王はその口髭を奮わせた。そこには強い憂いが見られる。彼は今こうして国を支える者達が次々と消えていくことに不安と危惧を感じていたのである。

「それ以外の何者でもない」

「左様です。然るに」

「何だ？」

「宮中では噂が立ちこめております」

「それについては私も知っている」

王はすぐに公爵に言葉を返した。

「魔術で殺しているのではないのか。そうだな」

「そうです。噂は急激に広まり」

「噂とはそうしたものだ」

王は忌々しげに言い捨てた。

「簡単に広まる。人の口に鍵はかけられないからな」

「はい。ですがこのままでは」

「首相が言いたいことはわかっている」

王は首相に顔を向けて述べた。

「このままでは。恐慌状態になるというのだな」

「そうです。早急に何とかしなければ」

彼は王に対して述べる。

「取り返しのつかないことになります」

「そうだ。しかし」

ここで王はまた言った。

「どうして死んだのかわからぬ」

「それです」

そこであつた。何故彼等が死んだのか原因が一切わからないのだ。だからこそ噂にもなるし彼等も対処のしようがなかったのである。

「同じ死に方ですが。それがどうしてなのかは」

「犯人として怪しい者はいるか」

王は次にこう問うた。

「誰か。どうなのだ、そこは」

「それもわかりません」

公爵は残念そうに述べた。

「しかしです。思うのは」

「全て私の信頼する者達だ」

王は言った。彼等は全て優秀な者達であり王が仕事を任せている者達なのだ。そうした意味でこの公爵もまた同じである。

「皆今の問題で私に賛成してくれていたな」

「そうですね」

公爵は王の今の言葉にはつとした。

「そつえば」

「今の聖職者への課税問題に」

実は今この国は聖職者への課税問題で揉めているのである。財政難の解決と聖職者の特権と腐敗の解消が目的であるが当然ながら聖職者達がこれに頑強に反対しているのである。彼等とて自分達の特権を失うつもりはさらさらないのであるからだ。だからこそ問題になつてゐるのだ。

「全て賛成する方々ばかりです」

「そして反対派は一人も死んではおらぬ」

王は述べた。

「だとすればだ」

「何だ、簡単ではありませんか」

ここで誰かの声が聞こえた。そうして一人の黒い髪に目をした浅黒い肌の若者が入つて来た。黒い髪は長く伸ばし髭は剃っている。細身で鋭利な顔立ちの美男でありその吊り上がった切れ長の目が特

に目立つ。服装は黒づくめであり黒い上着にズボン、靴、マントという格好だ。実に目立つ若者であった。

「それでは答えは一つしかありません」

「何用だ」

王は彼の姿を認めて言葉を少し曇らせた。

「呼んだ覚えはないぞ」

「おや、そうでしたか」

だがこの黒づくめの若者は彼にそう言われても平気な様子であった。

第二章

「そろそろ私の出番だと思い参上しましたが」

「出番だと」

「左様です」

何か自信に満ちた笑みを浮かべて王に述べるのだった。

「一連の怪死についてお話されていますね」

「そうだが」

王は彼に顔を顰めさせたまま述べた。

「気付いていたのか」

「また一人亡くなりましたね」

彼は王の問いにまずは答えずに自分から問うてきた。

「ローズ卿が」

「その通りだ。惜しい人物を失くした」

「失くしたのではないでしょう」

しかし彼はそれをこう訂正するのであった。何か思わせぶりな笑みと共に。

「この場合は」

「では何だというのだ？」

「その前に先の父上の問いにお答えしましょう」

王を父と呼びながら答える。

「わしの問いにか」

「はい、気付いていました」

ここでようやくこう答えてみせた。

「ここまで事件が続くと。それも当然です」

「そうか。それで太子はどう考えるか」

王はここで彼を太子と呼んだ。彼の名はリチャードといいこの国の太子である。王の長男であり常に黒い服で身体を覆っている。その服装と冷徹で冷笑を好む性格と鋭利な頭脳から黒太子と呼ばれて

いる。

「暗殺ですね」

彼は真剣な顔を作ってそう王に述べた。

「暗殺か」

「はい、黒幕もおおよそわかっております」

彼はそう父王に告げた。

「黒幕もか」

「これはあくまで憶測ですが」

そう前置きしたうえでの言葉であった。

「これまでその暗殺された者達は皆父上の股肱の臣ばかり」

「その通りだ」

それを聞いた王の顔が忌々しげに歪む。だからこそ彼も困っているのだ。自らの信頼する腹心達が次々と消えていつているのだから。

「しかも聖職者への課税問題に賛成しております」

「そうだ。それはわかつているのだな」

「左様です。それならばこの場合黒幕として考えられるのは」

「あちら側しかおらぬな」

王は暗い顔で述べた。

「一つしか」

「そういうことです。そしてその中でも」

「一人しかおらぬな」

「そうですな」

王と公爵の顔に同じ暗さが宿った。彼等の脳裏にある男の顔が浮かんだのである。

「ルネンツ枢機卿か」

「そう、あの御仁です」

太子もまた彼の名前に対して頷いた。ルネンツ枢機卿とはバチカンがこの国に遣わした枢機卿である。枢機卿と言えば聞こえがいいが謀略と奸智を好む人物でありそれにより今の地位に登りつけた男である。荒淫で贅沢を好みそれを手に入れる為にも多くの者を陥れ

てきている。残念なことにこの時のバチカンに多いタイプの男であった。これが聖職者の実態でもあったのだ。

「あの御仁ならば」

「充分過ぎる程考えられるな」

王は太子の言葉にあらためて頷いた。

「では。毒殺か」

「そう考えられます」

太子は王に対して答えた。

「いずれも身体がドス黒くなり事切れておりますので」

「そうだな。そういえばあの枢機卿の周りでは」

「こうした不審な死が実に多いのもまた事実です」

太子はそこを指摘する。

第三章

「それも昔から」

「そういえばそうだ。しかし」

ここで王は言う。

「問題はそれが何の毒かだ」

「何のですか」

「まず考えられるのは料理や酒に毒を入れることだが」

王はそこを指摘した。これはよくある話だ。実際にこの時代においてはそうした暗殺は実にポピュラーなものであった。とりわけイタリアにおいてはそうである。何しろイタリアはその謀略渦巻くバチカンがあり群雄割拠であつたからだ。毒で死んだ者は枚挙に暇がない。

「それはどうか」

「調べてみる必要があると思います」

太子は述べた。

「それで父上」

「うむ」

「今回の事件の解決、私にお任せ頂けるでしょうか」

「やってくれるのだな」

「はい」

その低く鋭い声で答えた。その声はまるで剣であつた。

「是非共。それでは」

「わかつた。では頼むぞ」

「はっ」

太子は一礼して王に応えた。彼はまず僅かな部下を連れてローズ卿の自宅を訪れた。まだ葬儀も埋葬も終わっておらず家の者達が茫然としていた。その中にあえて入つたのである。

「これは殿下」

「ようこそここに」

「見舞いに來たのだが」

太子は恭しく自分を出迎えるローズ家の者達にそう言葉を返した。ローズ卿の屋敷は中世の城であり太子から見れば随分古風なものであった。

「どうなったのだ」

「奥の部屋に移しています」

卿の妻が答えた。見れば涙の為に目が真っ赤になっている。プロンドの美しい女性だがそのせいでその美貌が台無しになっている。

「そうか。奥の部屋か」

「そうでございます」

そう彼に答えた。

「宜しければそちらに」

「わかった。だがその前に」

「その前に」

「卿の食事を見たいのだが」

「お食事ですか」

夫人はそれを聞いて怪訝な顔になった。

「またどうして」

「卿は美食家だったと聞く」

この時は笑みを作った。これもあえて、であるが。

「一体どうしたものを食べているのか気になってな。台所はいいか」
「ええ」

太子の言葉であるので断りようもなかったがそもそも断るつもりはなかった。夫人はむべもなく彼の言葉に対して頷くのであった。

「宜しければ」

「わかった。それでは」

その言葉を受けて台所に入る。台所に向かう時に彼は己の手に指輪を嵌めた。それは一見ごく普通の指輪であるがよく見れば普通にある宝石ではなかった。何か思わせぶりの輝きを持つ宝石であった。

その宝石を嵌めて台所に入る。細かいところまで調べたが特に何もない。調べながらその指輪の宝石を見ていた。

調べ終わり台所を出た。彼は一つの結論を得た。

「料理ではないな」

そうして次に酒蔵に向かう。しかしそこでも同じであつた。

「如何でしたか、我が家の素材等は」

「実にいいものが揃っている」

酒蔵の外で出迎えてくれた夫人に対して答える。これは実際に見たうえでの言葉である。

「酒までな。絶品揃いだ」

「主人は何しろ味に五月蠅くて」

彼女は今日事切れたばかりの夫を懐かしむ声で太子に説明するのであつた。その声が実に痛々しく悲しいものであつた。

「それで」

「そうだったか。では次は」

彼はその話を聞きながらさらに言うのだった。

「ローズ卿のところに行きたいのだが」

「こちらです」

案内されたのは奥の部屋であつた。部屋の中は意外と質素だ。単なる風景画と窓がありそこにはカーテンもない。床にも絨毯といった豪華なものはない。あくまで質素な部屋だった。目立つのはベッドだがそれすらも天幕のものではない簡素なものであつた。

「ここか」

「驚かれましたか？」

夫人はこう太子に言ってきた。

「この部屋に」

「質素だな」

驚くとは述べずこう述べるのだった。

「食道楽だが。それだけか」

「はい、主人は口は肥えていましたがそれ以外の贅沢には興味があ

りませんでした」 16

「それもよくある話だな」

「そうなのですか」

「贅を極めるかそれとも一つのものに凝るか」

彼は言った。

「人はどちらかだ。ローズ卿は凝る者だったのだな」

「そうなのでしょう。他の遊びもしませんでしたし」

「それはそれでいいことだ。少なくとも食は他人に危害は及ばさない」

「はい」

「精々己の身体を壊すだけだ。少なくとも」

そうして言う。

「ローズ卿は他人を害してまで何かをする者ではなかった。その彼がな」

「これも。運命でしょうか」

「そうかも知れない」

いささか冷徹な声で夫人に言うのだった。

「人が死ぬも生きるも。人が決められるものではない」

「神が決められるのですか」

「それとも悪魔が」

実は彼はあまり神というものを信じてはいない。はっきり言えば無神論者であった。だからこそ宗教にもかなり冷淡なのだ。実を言えば聖職者への課税も彼の提案である。そうした特権も好まないが何よりも神を楯にして私腹を肥やす彼等が気に食わないのである。もともと第一の理由はやはり財政難の解決であるが。それにしても原因は教会の民衆への搾取というのだから実に性質の悪い話であった。

「それはわからないがな。それで」

「ええ」

ここで話が動いた。

第四章

「ローズ卿は」

「あそこです」

夫人が手で指し示したのはその天幕もないベッドであつた。見れば彼はそこに横たわっていた。

「ふむ」

太子は彼を見るとゆつくりと歩み寄つた。そうして顔を見る。

見れば確かに真っ黒になつていて事切れている。その黒さはさながら黒死病のようであつた。

「死因は確か流行り病になつていたか」

「そうです」

夫人も真相は知っていたが。それは決して公にされないものであつた。

「そういうことにしました」

「わかつた。しかし」

ここで彼はさらに屍を見る。見れば見る程恐ろしい有様であつた。肌が黒くなつていただけでなく苦悶の跡がはつきりと見られる。目は大きく見開かれ歯を食いしばつた形跡がはつきりしている。手は身体中を掻き毟りその血の跡でベッドまで紅く染まつている。それを見れば彼が苦しみ抜いて死んだのがわかる。

「酷い有様だ」

「何故ここまでなつたのか」

夫人は顔を落としてそう述べた。

「やはりこれは」

「それを今から調べる」

太子はその夫人にこう述べた。そうしてまずはその屍をさらに見た。見れば屍は傷だらけだ。しかしその傷には別に暗殺を思わせるような刃の跡はなかつた。だが太子はその屍の首筋にあるものを見

つけたのだった。

「これは」

二つの穴だった。そこからも血が流れているがそれは僅かなものであった。

「ふむ」

「何かおわかりですか」

「いや」

夫人に対しては隠すことにした。ここは芝居をする。

「残念だが」

「そうですか」

「しかしこれだけは言っておく」

身体を起こし屍にシーツをかけてから夫人に顔を向けて声をかける。

「他言は無用だ。そして」

「そして？」

「事件は必ず解決する」

強い声で述べるのだった。

「ローズ卿の無念は必ず晴らす。わかったな」

「わかりました」

夫人としては相手が太子なので頷くしかなかった。しかしただ頷いたのではない。太子の言葉を信頼してもいた。何故なら彼女も太子を知っているからだ。その能力を。

「それでは。御願います」

「見舞いは終わった」

太子は夫人からの言葉を受けた後でそう述べた。

「ではな。邪魔をした」

「これで。帰られるのですか」

「見舞いに来ただけだ」

そういうことになっている。彼はそう言っただけだった。
「だからだ。それではな」

「わかりました。それでは」

こうして彼は宮殿に帰った。そうしてすぐに父王と公爵のところに行きことの次第を報告した。そうしてこう二人に対して言うのであった。

「事件は解決しました」

不敵な笑みで二人に述べた。

「何を言うのか」

王はそれを聞いてまずは顔を顰めさせた。

「あまりわかってもないではないか」

「いえ、もうこれで充分でございます」

太子はその不敵な笑みで王に言葉を返すのだった。

「これで」

「考えがあるのか」

「その通りです。まずは」

彼はさらに言う。

「噂を流します」

「噂を!？」

「はい、私が枢機卿を除こうとしていると」

あくまで犯人を枢機卿と考えていた。これはもう確信していた。

だからこそあえて彼を除こうとしているという噂を立てることにしたのである。

「その噂を流します」

「ですがそれでは」

それを聞いた公爵が怪訝な顔で彼に問う。

「殿下の御身に危険が」

「何、それが狙いだ」

しかし彼はその不敵な笑みで答えるだけであった。

「そうして刺客が来たところを」

「捕らえるというのだな」

「そうです」

はつきりと父王に述べてみせた。

「それで万事は解決します」

「そうであればいいのですが」

「既に何もかもわかっています」

太子の中ではそうであつた。あくまで彼の中だけで。他の者がそれを知る由はない。それこそが彼の思ふ壺でもある。

「後は。話の幕を引くだけです」

「わかつた。ではやってみよ」

王はここは彼に全てを任せることにしたのだつた。

「思うようにな」

「はい、それでは」

こうして彼はこの事件の解決も全て任されることになった。まず彼は自身の腹心の者を集めてこう指示を出したのだ。すで彼等が枢機卿やそれに近い者達とは何の関わりもないことはわかつていた。

「噂を流せ」

「噂をですか」

「そうだ」

そう彼等に対して告げた。場所はこうした話に相應しい密室の中であつた。

「私が枢機卿を暗殺しようとしている。こうな」

「ですがそれは」

早速一人が異議を呈してきた。

「あまりにも危険では」

「そうです。ただでさえ一連の事件は数奇慶賀黒幕と言われているす」

別の者もこう言ってきた。

「それでそうした噂を流せば」

「自然と枢機卿が」

「だからだ」

しかし彼は腹心達の気遣いの言葉に対してこう返すのだつた。余

裕に満ちた笑みと共に。

「だから流すのだ」

「むざむざ狼を呼び込むのですか」

「やはり危険です」

この国では狼が最も恐れられている。だからこそ今狼という言葉が出たのである。

「危険はわかっている」

しかし彼は平然とこう返すだけだった。

「当然な」

「ならば余計に」

「危険過ぎます」

「私が何の考えもなしにするとでも？」

ここであつた。彼は言つた。

「思ふのか？」

「いえ、それは」

「ありませんが」

それは彼等も思つてはいなかった。太子の鋭利さは彼等もわかっている。そうしたところに湧き起こっている魅力によって彼等も彼の腹心になっているからだ。それについては彼等は否定出来なかった。

「それでは。いいな」

「はい」

「殿下に何か御考えがあれば」

「ではまずはだ」

ここまで話したうえで彼等に言うのであつた。

「備えをはじめる」

「備えをですか」

「そうだ。まずは氷室から氷を出せ」

この時氷は冬の間に自然に出来た氷や雪を入れておくものであつた。氷室は大抵地下の寒い場所に置かれている。そこに保存してい

るのである。

「氷をですか」

「そう、そして」

彼はさらに言う。

「皮を用意しておいてくれ」

「皮をですか」

「そうだ、しかもかなり厚い皮をだ」

こつも注文をつける。

「いいな、厚い皮をだ」

「一体何に」

「氷と皮とは」

「その時になればわかる」

彼はここでは全てを述べなかつた。あえて隠してそのうえで含み笑いを浮かべるだけであつた。

「その時にな」

「そうですか」

「それでは」

彼等も今はそれで納得することにした。こつして準備は整えられていったのであつた。

第五章

それから数日後。太子はいつものように自身の部屋で寝ていた。

その警護は厳重なものであり窓は全て二重に閉められ扉の前には兵士達が詰めている。とても暗殺なぞできるとは思えない。当然食事にも気を配り食材を自分で選んで自分で作る程であった。そうして身の回りを慎重に固めていたが今その部屋に何者かが忍び込んだのである。

その何者かはゆつくりと彼に近付いていく。そうして。彼の身に何かが起こったのであった。

翌朝。彼に仕える従者が起こしに来た。するとすぐに返事が返って来た。

「話は終わったぞ」

「終わった？」

「そうだ」

最初は何事かと思ったがそれは間違いなく太子のものであった。

彼等もそれはわかりとりあえずは安心した。しかしそれだけではなかったのだった。

「すぐに来てくれ」

彼はこう従者達に言うのだった。

「すぐにな。いいな」

「部屋の中にですね」

「そうだ」

そう言葉が来た。部屋に入るようにとのことだった。

「いいな」

「はい」

「それでは」

彼等はその言葉に従い部屋の中に入った。絹のカーテンや紅い絨毯で飾られた豪華な部屋である。その部屋の中に太子はいた。見れ

は既に普段の服装であつた。

「服でしたら」

「私共が」

「何、用心の為だ」

鋭利な笑顔で笑つて彼等に述べる。彼はベッドに座つて彼等に顔を向けていた。

「これもな」

「そうでしたか」

「確信はあつたがそれだからこそだ」

こつとも言つのだつた。

「一応はな」

「一応は、ですか」

「すぐに動けるにこしたことはない」

流石であつた。そうしたところまで丹念に気を配っていたのだ。

その為普段の服で寝ていたというのだ。彼等は太子の言葉を受けて大きく頷いた。それと共にあることに気付いたのであつた。

「それにしてもこの部屋は」

「やけに」

「寒いか」

鋭利な笑みを向けたまま彼等に問うたのだつた。

「部屋の中が」

「ええ、これは一体」

「どういふことですか？」

「これだ」

彼はここで部屋の片隅を指差した。そこには氷があつた。

「氷ですか」

「まさか氷室の」

「そうだ、その氷だ」

彼等に告げる。先に氷室から出すように命じたあの氷であつた。
「それを出してここに置いておいたのだ。塩をかけてな」

「塩をですか」

「氷に塩をかければ余計に寒くなる」

彼は従者達に述べる。

「それで部屋をことさら寒くさせていたのだ」

「そうだったのですか」

「その通りだ」

また答えてみせた。

「それは成功したな」

「成功!？」

「何に」

「見る」

ここで部屋の床の真ん中を指し示した。するとそこにいたのは蛇であった。血の様に赤い色の蛇であった。

「蛇ですか」

「そうだ」

太子は言う。

「わかるな」

「それはわかりますが」

従者達は彼の言葉に答える。しかしそこには疑念もあった。

「しかし」

「どうして蛇がそこに」

「寝ているのか聞きたいのだな」

太子はその言葉を受けて従者達に問い返した。見れば彼等はいかにもそうした顔を見せていた。

「そうです」

「どうしてでしょうか」

「考えてもみよ」

ここで彼は言うのであった。

「考える、ですか」

「そうだ。蛇は何時出るか」

彼はまた問う。

「夏か、それとも冬か」

「夏です」

その答えは決まっていた。それ以外にはなかった。

「冬には出ません」

「何故ならそれは」

「寒さに弱いからだな」

「その通りです」

「それでは」

ここで彼等はようやく気付くのであった。太子にとっては遅まきながらであるが。

「その氷だ」

「その通りだ」

太子は彼等のその問いに不敵に笑って答えるのであった。その笑みには絶対の自信さえ浮かんでいた。

「わかるな。それに塩もかけた」

「塩もですか」

「そうすれば余計に寒くなる」

彼はこうも述べた。

「だからこそさ」

「それではやはり」

「寒さは」

「そうだ、蛇に対してだ」

ようやくといった感じであった。手の内を全て見せたのであった。

「これはな」

「左様でしたか」

「だからこそ塩まで」

「その寒さで蛇を眠らせた」

蛇を見ながらの言葉であった。冷徹でありながらも実に学問的な、
そつした響きの言葉であった。

第六章

「これでわかったな」

「はい」

「そういうことでしたら」

「それに。その寒さの方がこちらもやり易い」

ここまで語ったうえでこう述べるのであった。

「やり易い？」

「それは一体」

「この服だ」

今度は己の服装を指し示した。見ればかなりの厚着で戦場に出る程のものではないがそれでもこの季節に着るものでは到底なかった。

「その方がこの服で過ごし易いものだ」

「その服は何の為でしょうか」

従者の一人が今度はそれに問うた。

「宜しければ御答え願えませんか」

「これか」

太子はその問いもまた受けて答えるのであった。

「これも蛇への備えだ」

「蛇のですか」

「蛇の武器は何か」

そうしてまた問うのであった。

「二つあるな。それは何だ」

「一つは牙です」

これは言うまでもない。蛇が何故恐れられているのか、まずはこれであった。そうして蛇の恐怖というものはそれと必ずセットになっているのであった。

「そしてもう一つ」

「それは」

「毒だな」

太子の方からもう一つの答えを言ってきたのであった。

「そうだな」

「はい」

「その通りです」

これは従者もわかっていた。だからこそすぐに答えたのだった。

「それではその二つを防ぐ為に」

「その厚着は」

「これもな」

太子は首も見せる。そこには首全体を覆う厚いカラーがあった。それで自分の首を守っていたのであった。

「これもある」

「成程」

「そうして御自身を守っておられたのですか」

「わかったな。用心には用心が必要だ」

あらためて彼等に対して言うのであった。

「こうして私は刺客を退けた」

「この刺客を」

「この蛇を」

従者達もまた蛇を見下ろしていた。蛇は何も語らずにそこに横たわっている。死んではない。ただそこに眠っているだけであった。太子はその蛇を見下ろして言うのであった。

「この蛇が誰に手によるものかわかるな」

「無論です」

「やはりこれは」

「そうだ、枢機卿の手によるものだ」

それはもうわかっていた。それしか有り得ない答えであった。

「さて、どうするべきか」

全てを踏まえて太子はまた言った。

「これで枢機卿は私も本気で消すつもりだとわかったわけだが」

「容赦することはありません」

彼に忠実な従者達はすぐに彼に述べるのであった。

「ここは復讐を」

「誅殺を」

それぞれの口で言う。だがそれに対して太子は首を静かに横に振るのであった。

「それはできぬ」

「どうしてですか」

「この蛇は」

「では聞こう」

太子はまた己の従者達に対して問うのであった。

「証拠はあるのか」

彼が問うのはそこであつた。

「この蛇が枢機卿のものであると。その証拠はあるのは」

「証拠ですか」

「そうだ」

また彼らに対して言う。

「あるのか。どうだ」

「それはその」

「つまり」

「ないな」

曖昧な返事をする彼等をここで統括するのであった。

「そうだ、それに異論はないな」

「残念ですが」

「結局のところは」

そうなのであった。証拠と言われても結局のところは何もないのだ。この蛇にしろ誰のものなのか傍目にはわかりはしない。だからこそ彼はこの蛇で証拠を出すことはできないと言っているのである。

第七章

「枢機卿をこのことで追い詰めるのは不可能だ。向こうも知らぬ存ぜぬで通す」

「そうですね」

「あの枢機卿なら」

「しかし。消すことはできる」

だが彼はそのうえでこう言っただった。平然とした、それでいて酷薄なもののある顔で。

「彼をな」

「できますか」

「それではまさか」

「そうだ、自分の手駒で死んでもらう」

その酷薄な顔で蛇を見下ろす。そうして言うのである。

「どうだ、それで」

「それではこの蛇は」

「死んではないない」

また蛇を見て述べる。

「眠っているだけだ。言うならば冬眠だ」

「冬眠!？」

「蛇は寒い中では冬眠する」

そのことを従者に対して説明してみせた。

「それもあつて寒くさせたのだ」

「部屋の中ですか」

「そうだ。これを枢機卿の部屋に忍び込ませろ」

彼はそう指示を出した。

「よいな、それで」

「はい」

従者達は今の太子の言葉に頷いた。むべもなくといった様子で。

「わかりました」

「それではすぐに」

「頼むぞ。上手くいけばこれで話は終わる」

「こうも言った。」

「これでな」

そのうえでその酷薄な笑みをさらに深いものにさせるのであった。彼の打つ手はもう行われていた。そうしてそれから数日後。枢機卿が急死したとの話が伝わったのであった。

「死んだな」

「そうですね」

太子はそれを父王から直接聞いていた。二人は公爵も交えて王の間で三人で話をしていた。その時の話なのであった。

「身体がドス黒くなって死んでいたそうだ」

「おやおや、それは」

太子はそれを聞いてわざとおどけてみせた。

「同じではないですか、今までの死に方と」

「そうだ、同じだ」

王もそれはわかつている。わかっているからこそそこを強調するのであった。

「死んだ。同じようにベッドの中で」

「ふむ」

「やはり死因はわかりはしない。一応は病死ということになっている」

「病死ですか」

それを聞いた時の太子の顔がシニカルな笑みに包まれた。それは真相を知っている者の笑みに他ならない。その笑みを今ここで見せているのである。

「それはまた」

「不思議な話だな」

王はあえて太子のそれに乗リ。こう言うのだった。

「ここまで急死が続くとは」

「流行り病でしょう」

太子の言葉はあくまでしれっとしたものであった。少なくとも記録のうえではこうなるものだ。実際のところこうして急死した話が多い。真相は普通に記録や歴史を見ただけではわからないものなのだ。

「ただの。しかし」

「それもこれで終わりだな」

「はい。病は過ぎました」

またクールに述べた。

「程なく」

「そして聖職者への課税は」

「何の問題もなくなりました」

太子はそれが本題であると言わんばかりに言ってみせた。やはりここでもシニカルな笑みである。

「よいことです」

「それでは陛下、殿下」

公爵が二人に声をかけてきた。穏やかだが笑みを含んだ声で。

「今からそれについてお話しますか」

「そうだな。では太子よ」

「はい」

父王の言葉に顔を向ける。

「それに関してそなたの意見を聞きたい」

「わかりました、それでは」

「そなたにもだ」

太子に声をかけた後で宰相である公爵にも声をかけるのであった。

「それでよいな」

「畏まりました」

「反対する者達に対しては病は起こることはない」

王はまた病を出したがそれはここだけであった。

「ただ牢に入れよ。わかつたな」

「わかりました。まあその心配も少ないでしょうが」

太子にはわかっていた。反対派の巨魁である枢機卿がなくなったからだ。だからその心配は消え去り彼等は安心して政策を遂行することができるのであった。

「それではそのように」

「うむ。そして」

政治の話は進む。なお一連の急死については記録では病死とあるだけであった。真相については当時から色々と言われているが結局は数の中である。全ては歴史の謎ということで終わっていた。ここに書いた真相を知る者は当事者だけであるが今ここにあらたにわかったこととして書き留めておきたい。この時の聖職者課税問題で何があったのかを。

暗殺者

完

2007・11・12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3690d/>

暗殺者

2010年10月8日15時04分発行